

---

# 花踏み鬼

romewo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花踏み鬼

### 【Nコード】

N3452Q

### 【作者名】

romewo

### 【あらすじ】

無口で内気な美少女と、暗く重い過去を持つ少女との出会い。それは運命か必然か。待ち受ける困難を乗り越え、少女達は成長していく！なんて話ではありません。

『第三王女のカエル様』の主人公宮本澄香とその親友椋山（梶山）恵美子が出会った頃の話です。本編よりもアグレッシブ過ぎる澄香が「現実」と馴れ合う術を学ぶまでと、それに引きずられる様に本性をさらけ出すようになっていく恵美ちゃんのサクセス(?)ストーリー。本編と併せてお楽しみいただけると幸いです。本編がR1

5なので、こちらもそうさせていただきます。『第三王女のカエル様』累計ユニークアクセス10ヒット記念です。一応。(この物語は不定期更新になります)

## 第一話

長い休み明けの学校というものは、浮かれ気分の名残でやたらと騒がしい。

特に夏休み明けともなると、夏の開放感が未だに子供達をかき立ててるのか、尚更騒がしい。

自分の成果に日焼け跡を競う様に見せ合う者、自慢半分に旅行の土産を配る者、今更宿題を書き写している者など、盛夏の蝉のよりもかまびすしい。

その中で、ただ独り静謐に包まれた少女がいた。

彼女の名は梶川恵美子。

艶やかで真つ直ぐな黒髪。

綺麗に切れ上がった二重の瞳。

小ぶりで薄い鼻。

上唇より下唇がやや厚めの、桜色の唇。

透き通る様な白い肌はきめ細かく。

その姿はまるで精巧な日本人形の様で、誰にでも彼女を壊れ物の様に扱うべきだと思わせる。

その効果は絶大で、クラス一のガキ大将佐伯健太でさえも、梶川恵美子にはちよっかいを出しかねていた。

「は〜い、みんな静かに〜」

城南小学校六年二組の担任は、二八歳独身の仲屋加世子すわいかよこと言う。

全体的にぼつちやりして朗らかな彼女は、児童達から親しみを込めて「加世子先生」と呼ばれていた。

「健太！ 席につけ！」

えくぼの浮かんだ笑顔で放たれるちよつと乱暴な口調すら、彼女の愛嬌を引き立てる。

「今日から二学期が始まります。というわけで、早速宿題を提出してもらいたい」

「……ええええ……」

彼女が言い終わる前に、児童達が不満の声を上げる。

それに少しも引く事なく、彼女は言葉を続けた。

「んですがあ！先に新しいお友達を紹介したいと思います」

「転校生!？」

「うそつ。聞いてな〜い」

「男？女？」

「ジャニーズみたいな格好いい男子がiiiiっ」

「AKBみたいな女子がiii!」

生徒達は口々に好きな事を言う。

その中で、ただ一人梶川恵美子だけは。

(こんな中途半端な地方都市に、そんな芸能人みたいなのが来るかよ)

と窓の外を眺めながら冷めた事を考えていたが、傍目には遠い眼差しで夏の終わりを惜しむ美少女の様にしか見えなかった。

彼女は決して口下手ではなかったが極端に口数が少なかったために、周囲からは内気な少女だと思われていた。

「静かに！そんな肉食獣みたいな勢いで構えられてたら、新しいお友達が怖がつちゃうでしょ!」

「……は……い!」

「じゃあ、新しいお友達を紹介します！宮本さん！入ってきて!」

ガラリと戸を開けて入ってきた少女は、一言で言えば普通だった。

ショートカットの髪でやや痩せ型だった。

身長はどちらかと言えば前から数えた方が早いだろう。

男子は期待していたような美少女ではない事にあからさまにガツカリし、女子は嫉妬する必要のない平凡な少女である事で逆に歓迎ムードとなった。

「宮本澄香です。S市から引越してきました」

S市というのは直ぐ隣の市だった。

「どうして転校してきたんですか？」

「健太！」

加世子先生の慌てた様な叱咤が飛ぶ。

子供というのは敏感で、そんな彼女の反応に直ぐに何かがあると  
感じ取る。

「え、六年生の二学期に転校なんて中途半端じゃん。どうせなら  
中学からじゃね？」

「人にはそれぞれ事情があるんです。宮本さん、健太の事は気にし  
なくていいから」

教師の取り成しを、けれど転校生は仕方がないとばかりに首を振  
って制した。

「別にいいですよ。後から知ってイロイロ言われるのも面倒なので」  
それから彼女は真っ直ぐ前を見て言った。

「両親が事故で亡くなって親戚のお家に引き取られたからこつち来  
ました」

流石にそんな事情だったとは思ってもみなかったのか、児童達が  
気まずげに身じろぎする。

そんな彼らを転校生はぐるりと見渡すと、淡々と語り始めた。

「アタシは見てないんだけど両親の…」

その後宮本澄香はたつぷりと十五分間、一体何のスプラッタ映画  
の話をしているのかと耳を塞ぎたくなる程、血みどろ肉片まみれの  
物凄い描写を、あの健太でさえ言葉を挟む隙がない程蕩々と喋り続  
けた。

児童達は初めこそシンツと静まりかえっていたが、やがて何処か  
らともなく嗚咽が上がり始める。

「う、うう…」

「ひっく、ひっく」

「こ、怖いよ、お母さん」

「み、宮本さん？」

加世子先生がそれとなく止めようと声を掛けるが、それでも宮本

澄香は喋り続けた。

そして最後に。

「とかだつたらイヤなので、皆さんアタシに辛い思いをさせない様に精々気を遣つて接してください」

終わった途端ホツとしたのか、六年二組全員が号泣していた。

「うわ〜ん！ ごめんなさい！ もう余計な事は聞きません！」

佐伯健太は、幼稚園以来初めて家族以外の前で泣いたのだが、その事をからかう余裕など誰にもなかった。

様々な泣き声が入り乱れる中、一人だけ泣いていない人間がいた。

（フン。佐伯は所詮小物だな。それにしても、あの転校生、やるな）

キラッと瞳を輝かせた、美少女梶川恵美子であった。

## 第一話（後書き）

澄香の言動にはイロイロと思う事もあるかと思いますが、その事について語るとネタバレになりますので…。あしからず。

## 第二話

梶山恵美子は内気で無口な美少女である。  
と、周囲からは思われていた。

彼女は内気ではなかったが、実際無口ではあった。  
だがそれも彼女の環境を鑑みれば無理ない事であった。

「恵美子、あら、どうしたの？ 何か良い事あった？」  
慌ただしく出社の準備をする傍ら声を掛けてきた母親の問いに、  
恵美子は答えずにジッと見つめ帰す。

「あら、そうなんだ。新学期早々良い事って、何かしら？」  
「新学期だから、ほら、転校生じゃないのかい？」  
母親の疑問に答えたのは、祖母であった。

梶山恵美子は母親と母方の祖母との三人暮らしである。  
父親は数年前に病気で亡くなっていた。  
元華族という典雅な家柄に相応しく、典雅な美貌の持ち主だった。  
その父親にそっくりな恵美子は、従って母親とも祖母とも余り似  
ていなかった。

二人は「どちらかと言えば」という社交辞令を付けても尚、平凡  
と言って余りある程平凡な顔立ちだった。

更に母親に至っては、肩幅も広く骨太な体格で、その上一七二セ  
ンチの長身に八センチ未満のヒールは履かないという主義の持ち主  
であった。

それは余すところなく、祖母の遺伝であった。  
そんな母と祖母に囲まれると、恵美子は更に華奢で可憐に見えた。  
「転校生が来たの？」

母親に尋ねられても恵美子はウンともスンとも答えな  
い。  
しかし。

「あらそう。どんな子？ え？ 面白そう？ 仲良く慣れそう？  
それは分からない？ 向こう次第？ 仲良くしたいなら、自分から

行動しなくちゃダメよ」

恵美子が一言も発しないにも係わらず、何故か会話は進んでいく。  
「恵美子はちよつと人見知りなところがあるからねえ。そういう所はあんたに似てるねえ」

「もうこの年で人見知りなんかしないわよ」

「恵美子はまだこの年だから、人見知りするんでしょう？ え？  
人見知りじゃない？ タイミングを伺ってるだけ？」

「何のタイミングよ。効果的かつ劇的なタイミング？ 何それ」

「効果的かつ劇的な出会い？ まるで運命の出会いみたいだねえ」  
「でももう会ってるじゃない」

「あらあら、ムツとない。可愛い顔が台無しよ」

「食べ終わったら、ホラ、食器下げて」

「今日は道場があるんだったわね？」

「帰りは気をつけなさい。必ず誰かと一緒に帰るのよ」

「え？ 今夜のおかず？ さつき朝ご飯食べたばかりじゃない」  
「ほら、いつてらっしゃい」

以上の様な会話が繰り広げられている間、恵美子がしたことと言え、少しばかり視線を動かしたり小首を傾げたり、或いは小さく頷いたりといった事だけだった。

超人的なまでに察しの良い母親と祖母に囲まれていては、恵美子が積極的に言葉を発する必要性を感じなくなったのも、無理からざる事と言えよう。

だが一方では、人をしてそうせしめる何か恵美子の方にもあるのだろう。

「梶川さんおはよ〜」

「恵美子ちゃん、おはよ〜」

クラスメート達の口々の挨拶にも、恵美子はただ小さく頷き返すだけだった。

ただ頷いているだけなのだが、端から見れば引っ込み思案の少女が彼女なりに頑張って周囲に溶け込もうとしている様に見えるなくも

ない。そうした印象を、彼女の浮世離れた美しさが助長していた。  
「恵美子ちゃん、算数の宿題やった？ ウソ！ やった！ 問二が  
分かんないんだけど、ノート見せてくれる？ ホント？ ありがとう  
」

「梶川さん、今日日直だよ。あれ？ 違った？ あ、ゴメン、加  
治さんだった」

全ての会話を、頷きと首を傾げる仕草だけで乗り越えていく梶山  
恵美子。

引っ込み思案であるということは、本質的に弱肉強食である子供  
の世界にあつて、得てしていじめの対象となりやすいものだが、彼  
女には典雅な美貌と共に生来侵しがたい気品の様なものが備わって  
おり、それは道理の分からぬ子供ですら彼女を患わせてはいけない  
と思わせる程だった。

そんなものだから、何時しか彼女は誤った常識を身につけていた。  
人は喋らなくても生きていける！

彼女の美貌は浮世離れしているが、彼女の思考の方が遙かに浮世  
から浮いていた。

そんな彼女の目下の楽しみは、一体何日連続で喋らずに過ごせる  
か、という不毛極まりないゲームの新記録を樹立する事だったりす  
るのだが、当然ながらそんな彼女の趣向を誰も知らずにいた。

（危機一髪！ ひゃゝあつぶねえっ！ 今日先生に当てられちま  
ったぜ！ 国語じゃなくて算数でよかった）

国語なら朗読しなければならぬが、算数なら黒板に答えを書け  
ばいい。

もし国語の時間に当たったら、仕方がない、朗読の代わりに黒板  
に書き写そう！

彼女がそんな覚悟をしている事など、当然ながら誰も知る由はな  
かった。

と同時に、彼女の口の悪さも、知られずにいた。



### 第三話

二学期の始業式の次の朝。

時刻は、七時半。

八時二十分までに登校すればよいはずなのに、既に教室にはほぼ全員が揃っていた。

彼らは行儀良く前を向いて席に着き、教卓に着いている人物の言葉を待っているらしかった。

といつても、そこに立つのは教師ではない。

学級委員長の山路彩花である。

背が高く、厚めの前髪と赤い縁のメガネが、彼女のトレードマークだ。

彼女自身には際だった個性というものはないが、彼女の傍らには常に個性的な人物が付き従っていた。

彼女の直ぐ隣に控えている副委員長早坂亘である。

柔らかかそうな茶色の髪と柔和な顔立ちをした、なかなかの美少年だ。

成績も良くスポーツ万能で、教師からの覚えもいい、絵に描いたような優等生で、女子達はあからさまな程姦しく彼の事を「王子」と呼んでいた。

山路彩花は、全員が席に着いた事を確認するように教室を見回した。

教室にいるクラスメイトは全員席に着いてはいるが、幾つかの空席もあった。

そのうちの一つは、何時もギリギリに登校してくる学校一の美少女梶川恵美子の席。

そして、今ひとつは転校生宮本澄香の席である。

他にも空席はあるが、山路彩花はその事については気に留めなかった。

「それでは、今から臨時学級会を開きたいと思います」

六年二組は、時々生徒達が自主的に学級会を開く。

教師も閉め出したそれを全て取り仕切っているのが、学級委員長  
の山路彩花と副委員長の早坂亘である。

彼らは普段は控えめすぎるくらいに控えめだが、クラスが一丸と  
なつて何かに取り組む時には必ず先頭に立つのが習わしだった。

「今回の議題は、転校生宮本澄香さんの取り扱いについてです」

臨時学級委員会の開催は、夕べの内に宮本澄香を除く全員にメー  
ルで通達していた。

「早速ですが、意見のある人は挙手してください」

山路彩花の言葉に、教室のあちこちで手が上がる。

「はいっ」

「ハイ」

「はい」

「ハイ」

積極的なクラスメイト達に満足げに微笑みながら、山路彩花は一  
人の生徒に視線を当てた。

「じゃあ、佐伯健太君」

「オレ、手え上げてないじゃん！」

「挙手した人を当てるとは言っていないません」

「普通は手を上げたヤツを当てるもんだろっ」

「普通つて何ですか？」

「へっ？ そ、そんなの、ジョーシキつてヤツだろっ」

「常識つて何ですか」

「それは、みんなが普通だつて思つてる事だよ」

「みんなつて誰ですか？」

「みんなはみんなだろ！ お前とか、阿部とか、吉田とかっ」

佐伯健太の小学生らしい言い分に、山路彩花は頷いた。

「なるほど」

「そっだよっ」

彩花のまるで納得したかのような言葉に、健太は安堵して腰を下ろす。

が。

「では、ここに緊急動議を提案します。佐伯君の常識に関する意見に賛成の人、手を上げてください」

「おい！ ちよつと！ なんでそうなるんだよ」

「委員長権限です」

「オーボーだぞ！」

「では更に緊急動議を。私六年二組学級委員長山路彩花が横暴だと」  
「分かったよ！ 分かったから！ オレの意見に賛成のヤツ、手え上げる！」

佐伯健太は威圧的に怒鳴り散らしたが、誰もその声に応える者はいなかった。

シン。

「なっ！ なんで誰も手を上げないんだよっ」

確かに佐伯健太はガキ大将気質で乱暴な所もあるが、決して恐れられている存在ではなかった。何故なら彼らは、既にその歳にして決して逆らつてはいけない人間とはどういうものかという事を知っているからだ。

「阿部っ！」

「健太っ、スマンツ。オレはまだ死にたくないっ」

「吉田っ！」

「ふがないオレを許してくれっ」

「そんなっ」

「佐伯君の意見は受理されませんでした。というわけで、佐伯君、宮本澄香さんの取り扱いについて意見を述べてください」

佐伯健太は不満気に舌打ちした。

阿部隼人も吉田雄馬も、普段は健太と一緒に悪ふざけに興じる悪ガキ仲間だ。

二人とも大抵の場合健太に同調するのだが。

事、委員長が絡んでくるとなると、決して健太の側には立とうとはしなかった。

「……………」

「佐伯君、意見はありませんか？」

「ねえよっ」

佐伯健太はすっかり拗ねたらしく、そっぽを向いたまま言い放つ。それを山路彩花は咎めることもなく、ただ冷静に言葉を継いだ。

「では佐伯君は今回の学級会の決定に関して、抗議する権利を失います」

「なんでそうなんだよっ」

再びいきり立つ健太に対して、山路彩花は何処までも冷静だった。「意見のない人間には、誰かの意見について文句を述べる資格がないからです」

「何だよソレ！！ オーボーだぞ！ おい！ 早坂！ お前も黙ってないで何か言えよ！」

健太がそう言った瞬間、一瞬空気が凍った。

だが健太はそれには気づかずに。

「お前が山路を後ろであやつってるんだろっつ。お前みたいなのをな！ くるまくって言うんだぞ！」

名指しで非難された早坂亘は、しかし柔らかな笑顔を浮かべて言った。

「やだなあ、健太。僕が彩花ちゃんに何か指図するわけないじゃないか。何せ僕は、彩花ちゃんの言う事は、どんな無茶な事でも従うと決めているからね」

もし少女漫画なら間違いないくバックに花が咲き乱れているだろう。だが実際に少年が背負っているのは、ドス黒い暗雲だった。

（健太！ 頼むから黙ってくれ！）

（これ以上、早坂を刺激すんなっ）

クラスメイト達の心の声は、残念ながら健太には届かなかった。

健太は早坂亘の迫力に内心で怖じ気づきながら、持ち前の負けん

気の強さでどうにか耐えた。

「へっ！ 女の言うなりってか！」

「うんそうだよ。だからね。彩花ちゃんの行く手を阻む者は、ミジンコほどにも容赦しないのさ」

「格好いい！ 早坂君！」

「ステキ！」

「こっち向いて笑って！」

教室のあちこちから黄色い声上がる。

けれど早坂亘は、それら全てをムシするように、山路彩花だけに更に輝く笑顔を向けた。

「ね、彩花ちゃん」

「キャ~~~~~！」

廊下にまで響き渡る勢いで、女子達の歓声声上がる。

しかし、笑みを向けられた当の本人はと言えば。

「ああ、分かつてる」

と、微塵の感動もなかっただけだった。

「何が『ステキ！』だっ。女の言いなりになってるだけじゃねえか  
っ  
っ

「うっさいわね！！ 早坂君は美少年だから、何をしても許される  
のよっ」

「なよなよしてるだけだろっ」

「ハン！ ガキのアンタには、早坂君のよさが分かんないのよっ」

「けっ。バツカじゃねえのっ。言っとくけどなっ、早坂は山路が好きなんだ。お前なんか見向きもしてねえんだからなっ」

佐伯健太は痛手を与えるつもりで言ったのだが。

「当たり前でしょ！」

「アンタこそ、バツカじゃないの！」

「早坂君は観賞用って決まってるのよ！」

「そっよそっよ！」

「あんな危ない性格の美少年、好かれたら逆に迷惑なのよっ！！」

「早坂君で、殆どストーカーよっ」

「変質者って言ってもいいわ!」

「相手が山路さんじゃなけりゃ、とっくに訴えられてるわよ!」

マシンガンの様な勢いで、女子からの反撃を受けてしまった。

佐伯健太はダメージを与えるどころか、逆に自分の方がダメージを被ってしまった。

それは単純に言葉の暴力云々というものではなく、何か理解しがたい恐れ故だった。

女子達は、早坂亘の本性を十二分に理解していた。

理解して尚、「王子」と呼んで騒いでいるのだ。

それは健太には、いや恐らく同年代の男子には、全く意味が分からなかった。

「女ってワケ分かんねえっ」

誰が言ったのかその言葉は、静まりかえった教室にやけに響いた。

そんな中、早坂亘が静かに言った。

「そこまで言われると、流石に照れるね」

「照れる所じゃねえ!」

健太の渾身のツツコミは、勇敢な行為だと後に賞賛を受ける事となる。

そのせいも、中学には行ってから佐伯健太は早坂亘の無二の親友と見なされる事になり、生涯の殆どに於いて多大な迷惑を被る様になるのだが、それはまた別の話である。

### 第三話（後書き）

今回この話にしては長めなんです。

あれ？ 澄香も恵美も出てきてない？

因みに、山路彩花ちゃんは、IQ160の天才です。

## 第四話

二学期が始まって一週間。

城南小学校六年二組は、初日の混乱などなかったかの様に、至って平穏な日々を送っていた。

二学期二日目に開かれた臨時学級会では、結局の所「各々自己責任で転校生に接する事」という事が決まっただけで、要するに何も決まらなかったのと同じ事だった。

だがそれでも、手探りながらも生徒達は転校生を受け入れ始めた。というのも、宮本澄香本人は、普段は至って普通の少女だったからだ。

猟奇的な発言もなければ、斜に構えた様な態度もない。

そこで生徒達は考えた。

両親の事故の事に触れなければ、宮本澄香は「まとも」だと。だが佐伯健太だけは、頑として彼女に対する警戒心を解こうとはしなかった。

「おい！ 阿部！ 吉田！ オレたちで宮本のホンショーをあばくぞ！」

放課後誰もいなくなった教室で、佐伯健太は悪ガキ仲間を前に、そう宣言した。

それを聞いて、阿部幹人あへみきひとと吉田光悦よしだこうえつは互いの顔を見合わせた。

彼らは互いの瞳に同じ思いを読み取った。

またか。

因みに、健太はほぼ毎日この言葉を繰り返している。

しかし未だ、健太の野望が果たされる気配は微塵もなかった。

何故なら、健太自身が宮本澄香を避けまくっているからだ。

今にしても、自分たちの他には誰もいないにもかかわらず、何故隠れる様にしゃがみ込まなければいけないのか。

健太は、まるで今にも宮本澄香が現れでもするかの様に辺りを警

戒している。

それは健太の常日頃の傍若無人さ　というよりも実は単に空気が読めていないだけなのだが　からはかけ離れた用心深さだった。「何だよ！　お前ら！　宮本が怖いのか！？」

何も答えない二人に、健太が憤然としていきり立つ。

幹人も光悦も高揚して赤味の差す健太の顔を見つめながら、「怖いのは健太じゃねえの？」と言いたかったが、敢えてそれは言わなかった。

健太は言葉も態度も乱暴だし、空気は読めないし、我が儘で飽き性だが、実は意外と繊細であるという事を、二人はよく知っていたからだ。

周囲からは佐伯健太の金魚のフンの様に思われている二人だが、その実二人なくしては健太は健太ではいられないのであった。

幹人は地域のサッカークラブに所属し、光悦は図書委員を務めている。

本来ならば、二人ともクラブや図書室に赴かなければならない時間だった。けれど、この一週間というもの、健太のこの奇妙な行動のせいで彼らはそれぞれの役割を放棄せざるを得なかった。

勿論、健太はそんな事は気づきもしない。

だがそれが健太の健太たる所以であり、健太との友情を望む以上それもまた受け入れざるを得ないと、若干十二歳にして二人はそう悟りきっていた。

この小学生にしては濃すぎる友情が、後にドロドロの三角関係に発展する。

という事はない。念のため。

「でもさ。本性ってさ、どうやって暴くわけ？」

「そうだよな。オレら二人とも宮本とは話したけど、普通だったし。な？　光悦」

「うん。幹人もオレも、何度か宮本さんとは話したけどな。全然フツーだったよ」

「それは、お前らがまるめこまれてるからだっ」

「健太。丸め込まれるの意味、知ってる」

「何となく!」

「やっぱりな」

「まあ、健太だからなあ」

「どういう意味だよ! いいか! お前らっ! ソレがアイツの作戦なんだ! 俺たちをユダンさせて!」

健太はそこまで言っ、てピタリと言葉を止めた。

「油断させて?」

「オレ達油断させて、何か企んでるって言いたいんじゃないの?」

「そう、それだ!」

「じゃあ、企みって?」

「宮本の作戦って何だよ」

「そんなの、知るわけねえだろ!」

悪友二人の質問に、佐伯健太は驚くべき程の正々堂々さで言うてのけた。

「なんなのも〜」

「健太あ〜」

思いつきり脱力した二人は、後ろ手に手をつけて天井を仰ぎ見た。きつと、人前で泣いた事が、物凄く悔しかったんだろうな。

そっういやあ、健太が人前で泣くとかって、幼稚園以来じゃなかつたっけ?

光悦と幹人は、未だになにやらブツブツとのたまわっている健太を余所に、それぞれの考えに耽る。

「おい! お前ら、聞いてんのか!」

「聞いてるよ、ちゃんと」

「とりあえず明日宮本の後つけて、アジト見つけるって言うんだろ?」

「それってさ、ストーカーって言わない?」

「けーさつに通報されんじゃないの?」

「大丈夫だ！ オレら未成年だから！ 犯罪者にはならねえぜ！」  
妙な知恵ばかりつけやがって。

二人は同時に思ったが、やはり二人とも何も言わなかった。

ま、健太だからな。

二人が一段も二段も上からの目線でそんな事を思っていると。  
ガラリ。

教室の扉が開いた。

見回りの教師か、忘れ物した生徒が入って来たのだろうと、幹人と光悦が伺い見ようとした時。

ガタガタガタガタツ。

慌ただしい物音に視線を戻してみると、佐伯健太が椅子を押しつけ机の下に入り込もうとしているところだった。

「健太？」

「おい、どうした？」

「しっ！ 黙れ！」

恐ろしく緊張した表情の健太に、二人の緊張も俄に高まる。

ペタペタペタペタ。

足音が、入り口から教室の奥へと進んでいく。

机の間から見える上履きは、汚れない真新しいもので、その主が宮本澄香だと言ふ事は直ぐに分かった。

案の定、窓際から二列目の一番後ろの席で、脚が止まる。

ガサゴソと机の中を探る音。

恐らく、忘れ物を取りに来たのだろう。

よく考えれば、同じクラスの生徒なのだから、隠れる必要はないのだが、とうか寧ろ隠れていると余計に不審がられると思うのだが、三人とも先ほどまで話題にしていた人物の前に堂々と立つ度胸はなかった。

「おい、お前ら、誰か行けっ」

宮本澄香がこちらに気づく心配がない事に安心したのか、健太がヒソヒソ声でそんな事を言い出した。少し考えれば、あれだけ派手

な物音を立てたのだから、気づかれないはずもないのだが、やはりそこら辺はまだまだ子供なのだろう。

二人とも健太に合わせる様に床に這いつくばって、ヒソヒソ声で返した。

「行くって？ 何処にだよっ」

「まさか、今？ このタイミングで？？」

「宮本は今、一人だ。だからイロイロ聞けるだろっ」

「イロイロって何を？」

「イロイロはイロイロだよっ」

カ  
ン！

グラウンドから乾いた音が響いた。

ファイト　！　オオ　！

野球部のかけ声が遠くに聞こえる。

いつの間にか教室に注ぎ込む陽光は金色を帯びて、早くなった落日に季節の変わり目を感じた。

幹人と光悦は「オレ達何やってんだろっな」とふと空しさを覚えた。

明日同じ図書委員の長谷部さんに何て言い訳しようかとか、もうすぐ練習試合なのにレギュラーは諦めた方がいいだろっかとか。

今日の晩ご飯のおかずは何だろっとか、夕方のアニメビデオしといたっけ？　だとか。

この場には関係のない無数の事柄が頭を過ぎる。

しかしそれに浸り続ける事は、健太が許さなかった。

「おいっ！　お前ら、怖じ気づいてんじゃねえぞっ！」

「分かってるよ…」

「別にそういうわけじゃないって」

「でもさ、何て聞くんだよ」

「宮本さん、一体何を企んでるの？　てか？」

「バカッ。そんなアカラサマに聞いたらバレるだろ」

「何が？」

「バレるって？」

「よく話からねえけど、何かがだよっ」

「健太は、よく分かんないことが多いね」

「うっせえなっ。アイツがワケ分かんないから、オレもワケが分かんなくなるんだよっ」

机の下で顔を突き合わせながらの声を潜めた応酬は、大人達から見れば子供らしくて微笑ましかったが、同世代の人間から見れば甚だしく怪しかった。

しかし彼ら自身は至って真剣で、従って子供にはよくありがちな事だが、自分たちの行為に集中し過ぎていた。

「何やってんの？」

「うわあっ!!」

「ひっ!!」

「ぎゃっ!!」

不意に降ってきた少女の声に、少年達は驚きすぎて、肝をフードプロセッサ―で磨り潰しそうになった。

ガッ!!

バタンッ!

ガタガタガタッ!

「痛っつてええ!!」

「うわちゃっ」

「くううっつっ!!」

勢い余って、健太は頭を、幹人は背中を、光悦は足を、強かぶつけた。

少年達は、暫くの間痛みに悶絶した。

しかし、痛みが強すぎて、宮本澄香の冷やかな視線を感じずにはすんだのは、彼らにとっては不幸中の幸いかも知れなかった。

「で？」

痛みが漸く治まった頃合いを見計らって、少女が素っ気なく言った。

「『で?』つて?」

まだ涙の残る目で見上げながら、健太が問い返す。

「何やってのんのかつて、さっき訊いたじゃん」

「えと、ああ、それね。うん」

「何をやってたって言われてもなあ」

光悦と幹人は、まさか本当の事も言えないので、さり気なく言葉を濁す。

昨今の小学生は「空気が読める」ので、こういう風に言えば大抵は引いてくれるものだ、彼らは知っていたし、それを「まとも」な宮本澄香に期待した。

しかし。

最大の敵は身内にあり。

空気が全く読めない人間が、彼らの側にいたのだ。

「かくれんぼだよ。机の下にいるなんて、かくれんぼに決まってるだろっ」

健太のとんでもない発言に、幹人も光悦も頭が痛くなった。

勿論、かくれんぼ自体は、「とんでもない」行為ではなかったが。

ここには三人しかいないのに、三人ともが隠れている。

しかも同じ場所に。

どう考えても、「かくれんぼ」は成立しない。

それを素早く悟ったのだろう、宮本澄香はフンツと鼻で笑って訊いてきた。

「じゃあさ、鬼は誰よ」

もつともな問いかけに、しかし健太は何の躊躇もなく答えた。

「秘密だ!」

「健太…」

「健太つてば…」

オレ達、育て方間違えたんだろうか。

思わず、幹人と光悦は、親でもないのにそんな事を思った。

「ふ〜ん」



ガタガタガタン！！

ガラガラ！！

ピシャン！

バタバタバタバタバタ

！！

少年達は、脇目もふらず走り去った。

だから残された少女が、

「けっ。たわいもない。リズの方が、まだ脅かしがあるちゅうのっ」  
なんてニヤつきながら呟いていた事は、幸運にも知らずに済んだ。  
「さ。忘れ物も取ったし、帰って夕飯作るか」

そう言っただけでも軽く帰路についた少女の腕には、『三歳からの英才教育』という分厚い本が抱えられていたとかいなかっただとか。

#### 第四話（後書き）

これまた長目に……。多分ワタシは健太が好きなのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3452q/>

---

花踏み鬼

2011年4月10日17時40分発行